

へ参りまして、

「エーお頼み申します」

受附の武士が、

「ア、誰だ〜」

「へエ、大黒屋市兵衛でござります」

「ア、左様か、何か用事か」

「へエ先刻菅沼の旦那様がお入来になりまして、お頼みになりました藝人を連れて参りました、菅沼

様へお通しを願ひます」

「ア、左様か、先刻お話しがあつた噺家を伴れて参つたのか」

「へエ左様でござります」

「少時其所に待つて居れ、早速言上げるから」

待つて居りますと、菅沼様がお越しになりました。

「オ、大黒屋市兵衛参つたか」

「へエ、先刻は失禮致しました」

「御苦勞だつたのウ、噺家を伴れて参つたか」

「へい、此處に居りますのが泥丹坊堅丸と申しまする噺家で」

「ハ、ア左様か、フムお前が上方の泥丹坊堅丸と云ふ噺家か」

「御意にござります」

「成程、どうも噺家だけに随分面白い顔だなア」

「有難う存じます」

「此度お姫様御病氣に付きお氣慰みにお伽噺をば言上げるのだが、成丈け面白い事を演れ、併し噺家の譯の解らん堅い事は實に聞き苦しいから雜俳なるが好いぞ、と申して猥褻の事などお耳觸りになるから、成丈け面白い奇麗なお噺を言上げる、宜いか、而して大きな聲を出すナ、お姫様御病氣で在らつしやるから、と申して餘り小さい聲では解らぬから」

「承知致しました」

堅丸は俯向ひて頻にお辭宜をして居りますと、お姫様のお手飼の矮狗が其處へ出て参りまして、堅丸の額口をばペロ〜と舐め廻します。

「ア、心の悪い、シイチャイ〜」

「ア、コリヤ〜、矮狗が噺家の額口を舐めて居る、湯を持つて來て洗ふてやれ」

「イへ大じござりません、お矮狗さまがお舐りになつたのでござります、萬望お介意くださいますナ」